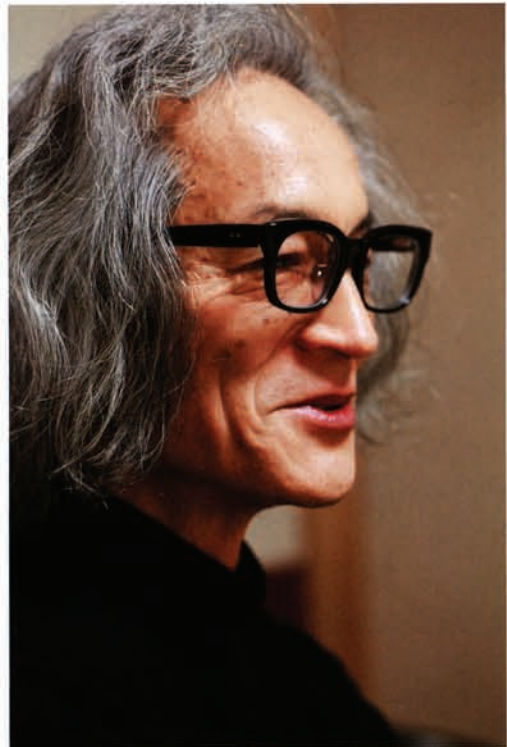


「アクロス福岡」に代表される
都市緑化に取り組んできたプランタゴ・田瀬理夫氏。
数々の作品には、生物多様性の
回復につながるものが多い。
ランドスケープアーキテクトとしてどのような発想で
それらの作品が生み出されてきたのか。
若手ランドスケープアーキテクト・平賀達也氏が、
作品に込められた思いを説明すべくインタビューする。

田瀬理夫 インタビュー

多様性の本質に 気づく感性を養う

インタビュー|| 平賀達也(ランドスケープ・プラス)
文|| 澤田 忍 写真|| 米田和久(特記以外)



たせ みちお
ランドスケープアーキテクト。1949年東京都生まれ。'73年千葉大学園芸学部造園学科(都市計画・造園史専攻)卒業。'73年～(株)富士植木勤務。'77年ワークショップ・プランタゴを開設。'78～'86年SUM建築研究所の一連の集合住宅プロジェクトに参加。'90年～(株)プランタゴ代表。現在、東京芸術大学、千葉大学大学院非常勤講師。主な作品: コートハウス国立、アクロス福岡、アクアマリンふくしま、BIOSの丘、地球のたまご、日産先進技術開発センター、QMCH(馬付住宅・馬100頭プロジェクト)

平賀達也(以下平賀) 田瀬さんへのインタビューという機会をいただき、僕自身が田瀬さんの仕事をいつも尊敬の念をもって拝見しているので、是非ともこの機会に、田瀬さんの世界観や設計思想、そして実際の仕事での本音のような部分をお伺いしたいと思っています。

僕は、田瀬さんの仕事としてリアルタイムに存じ上げているのは「アクロス福岡」(福岡市・中央区)以降なのですが、田瀬さんは大学卒業後、富士植木に入社され、その後SUM

建築研究所との協働で10年ほど集合住宅のランドスケープを手がけられています。実は田瀬さんの設計者としての原点のようなものが、その間に醸成されたのではないかと思います。

田瀬理夫(以下田瀬) 学生時代には建築設計事務所に入ろうと思っていたんですけど、造園の現場のことを学ぶ必要があると思い直して、造園の施工会社へ就職したんです。富士植木で学んだことは、実にたくさんあったのですが、4年間勤めた後、独立してランド

スケープのデザイン事務所を始めました。そんな折にSUM建築研究所の井出共治さんがランドスケープアーキテクトを探しているというので、一緒に仕事をするようになったんです。

1970年代後半という時代は、住宅を集合させることでより良い住環境をつくるという都市住宅が盛んに議論、計画された時代です。きちんと計画したものがそのとおり出来れば、明るい都市が建設できると。世の中全体がそのような動いていましたから集合住宅の計画も沢山ありました。

SUM建築研究所との協働での最初の仕事は「藤ヶ丘タウンハウス」(横浜・青葉区)です。低層集合住宅(テラスハウス)の中庭を歩車分離せず、樹木と車道をゆったり配置するという計画でした。その次が「ゆりが丘ヴィレッジ」(川崎市・麻生区)です。ここは環境アセスメントや団地認定の取得から始まり、竣工まで6年間取り組む仕事でしたが、都市計画法、建築基準法などの法規の意味、ディベロップのあり方、建築家、施工会社とのつきあい方などを思う上で、とてもよい経験になりました。

「ゆりが丘ヴィレッジ」は全82戸で、全戸3面開放、50㎡以上のルーフバルコニー付きという、理想的な住環境となっています。そこでは、いわゆる「造園」はしていません。周辺の雑木林に自生しているコナラ、クヌギやヤマザクラといった植物を植え、自然と周囲の雑木林につながるようになりました。また、



左・中／「ゆりが丘ヴィレッジ」(1993年「Japan LandscapeNo.26」掲載)。周辺の植生に合わせた植栽計画がなされた。
右／「藤ヶ丘タウンハウス」(1993年「Japan LandscapeNo.26」掲載)。歩車道を一体化させゆったりと低層住宅を配置したプラン。
写真＝SUM建築研究所

各戸のルーフバルコニーには基調となる混植の生垣を巡らせて、あとは自由にお使いくださいというスタイルにしたのです。

竣工から25年たった今でも、マンションの価値が下がらないと聞いています。そんな集合住宅が実現できたのは井出さんの住宅に対するアイデアが大きく影響しています。それは、建築は外側からだけでなく、内側から外との一体感をもたせて造るべきというものです。ごくシンプルで当たり前だと思うのですが、こういう思想で建築を造る建築家は、案外、少ないんです。

平賀 SUM建築研究所との仕事で、既に計画画周辺の植生に配慮されていたということですが、それは環境の再生や生物多様性の回復といった問題意識を持たれてのことだったのでしょうか？

田瀬 僕は子どものころ、武蔵野の雑木林が身近にある環境で育ちましたから、草木いっぱいの中で遊んでいたわけです。でも高度経済成長期に突入すると、どんどん開発が進み、武蔵野の風景が壊されていく様子を目の当たりにした。それを実感していたので、首都圏で仕事をするときには、武蔵野の景色が戻るように計画するというのが当然というように、独立当時から考えていたんだと思います。だから、植物を選ぶときは「その現場の近くに生えている植物がいいんじゃない？」という非常に素直な発想です。宅地開発や街並づくりにおいてそのような考え方で植物を選べば、自然を少しでも回復できるのではという。

知ったかぶらない、 素直な発想

平賀 若い世代のランドスケープアーキテクトで、田瀬さんの思想や設計作法を学びたいと思っている人は多いんです。

田瀬 僕は設計図書の作り方も極力シンプル。限りなく図面の数を少なくして現場で決める



「アクロス福岡」(1995年「Landscape Design 1号」掲載)のコンペ時に田瀬氏が使用後のラッピングペーパーなどで作成したコラージュ「花鳥風月の山」

ことを多くしているんです。ですから現場の設計監理まですることが、仕事を引き受ける前提になります。監理をしないということはクライアントに対して責任を取らないということになりますからね。

「アクロス福岡」なんて当初の実施設計図面は3枚ですよ(笑)。図面は設計図から施工指示図になり、さらに現場でどんどん変わる。それに対応するには、当初の線は極力シンプ

ル、仕様もシステムを表現し、それにふさわしい言葉を使うよう工夫しています。

そして現場の人たちには、現場が始まる前に出来るだけ丁寧にコンセプトを伝えるようにしています。その際大切なのは言葉です。理解しやすく、かつインパクトある言葉。それはプレゼンでも有効です。例えば「アクロス福岡」では植物に覆われた建物を山に見立てて「天神岳」といったり、「アクアマリンふくしま」では、福島県が生態的に南と北の境界線に位置していることに着目して、それを海ならば「潮目の海」、陸であれば「陸上の潮目」というような。そうすることで、現場の人たちにもイメージを共有してもらい、同じ方向を目指してプロジェクトを進めることが出来、良い結果が出せるんです。

平賀 現場は、いわゆる「チーム田瀬」のような息の合ったスタッフで進められるのでしょうか？

田瀬 特に決めてはいませんが、ただ個人邸を手がける場合は5×緑(ゴバイミドリ)や富士植木と一緒に進めることが多いですね。その際も特に僕の流儀を教えるとかそういうことではなくて、ちょっとした剪定の仕方の違いや、ポット苗の植え込み方に気遣うだけでだいぶ印象が変わるということを、時にはお施主さんも巻き込んで体験してもらうようにしています。そうするとお互い、愛着が湧くでしょう？ 公共事業ではもうやっていない、そんな体験ができるので、富士植木の若い人たちが、僕の現場に来たいといってくれてい

るようです。

僕が大切にしているのは「知ったかぶりをしない」ということです。誰かが専門知識をひけらかしたとたんに、そこでアイデアが止まってしまうんです。もちろん専門家の知識は必要ですが、新しいものを創ろうとしているのですから、既存のディテールをスライドさせるのではなく、専門知識に則った上での新しいアイデアを提示してほしい。そうやって新しいことにチャレンジしていくことで、現場の人たちにやりがいを感じてもらえて、現場が盛り上がっていくんです。そうした結果、クライアントから予想以上のものが出来たと感謝されて、ますますやる気になる(笑)。

だから僕の仕事の進め方は、わりと素直に考え出したものを、出来るだけそのまま実現するようにしているんです。状況に合わせていくと、現場はクライアントのものになってしまって、それ以上のものにならないんですよ。それでは最終的にクライアントも満足しませんから。

自然の山に 近づけるために

平賀 都市熱の緩和や生物多様性の回復といった効果によって、近年、ますますその評価が高まっている「アクロス福岡」ですが、現在、田瀬さんはどのような立場で関わられているのでしょうか。

田瀬 「アクロス福岡」で特筆すべきは、竣工から15年たった今でも、プラタゴに年間管理の監修というジョブが出ていることです。よほどのことがない限り契約更新されることになっています。自然の山の状態に少しでも近づけるために、「60年かけて育てていく」とエイ・エフ・ビル管理も宣言していますから、造った僕たちが関わり続けるということが大切なんです。これはクライアントに理解がなければできないことです。

具体的には、僕が年に1、2度現地に赴き、状況を確認して管理レポートを作成して、次年度の管理計画をたてます。ゆくゆくはこんなイメージの山にするためには、この木を払って、そこにこの苗木を植えましょうとか。毎年どんどん変わりますから、メンテナンス業務も、とても創造的デザイン行為といえます。

そういったことの積み重ねで、植物の種類も竣工当時は80種程度でしたが、現在は木本類で約150種、草本類で約100種と約3倍

になりました(P30参照)。福岡の周辺の山に比べたらまだまだ多様とは言えませんが、都市緑化の試みとしては面白いものになっていると思います。

「アクロス福岡」のような建築が東京や大阪にも出来ていれば、日本の都市景観もだいぶ違ったものになっていたはずです。バブル経済の崩壊など経済的な要因もあったと思いますが、この緑化が無灌水で維持できたり、落ち葉や枝打ちしたものをマルチングして土に戻すなどの工夫で、メンテナンス費が極端にかかるわけではないことや、緑化されたビルという付加価値がビルのレントラブル比を高めることにもつながっているのに、それが広く



「アクアマリンふくしま」(2005年「Landscape Design 45号」掲載)。自然植生と景観の再現を目指した海洋文化施設
撮影＝福島将之

伝わらなかったのは残念です。

平賀 無灌水というのはすごいですよね。

田瀬 そうなんです。でも、これはモックアップをつくって実験してみるまで確信はもてませんでした。幸運にも、実験を開始した年が、福岡気象台始まって以来の大渇水の年にあたったんです。現場近くで1/100の面積に相当するモックアップで実証実験したのですが、無灌水でも枯れなかった。さらに観察、計量を重ねて枝の伸び具合とか落ち葉の量などから、管理量を計算して、単純に100倍して管理費を見積もったら、当初の予定していた維持管理費の約1/3という数字になった。じゃあコンセプトどおり進められそうですねということになったんだけど、やっぱり心配

だと言い出す人もいて(笑)、灌水設備を付けました。でもテスト運転以外、一度も作動させたことはありません。

平賀 「アクロス福岡」や「ゆりが丘ヴィレッジ」は、人工地盤なわけですが、その際に使用する土壌に工夫はあったのでしょうか？

田瀬 「アクロス福岡」では人工軽量土壌のアクアソイルを使用していますが、とても良い植栽基盤です。一方「ゆりが丘ヴィレッジ」では、80年代前半当時、まだ人工土壌の性能に確信がもてなかったので無機質に近い赤土を使用しました。

実は、富士植木での最初の仕事が「京成上野駅」(東京・台東区)の拡幅計画に伴う公園の造園計画、つまり人工地盤に恩賜公園を造る計画だったんです。それは成田空港の開港に合わせたスカイライナー開通のために、一旦既存の公園を取り払って、地下駅を拡幅した後、また土を被せて公園を復元するというものでした。駅拡幅工事の許可を受ける条件が、以前より明らかに緑量を増やすことという、ランドスケープ主体のプロジェクトでしたから、人工地盤についてはいろいろ調べましたよ。「宮下公園」(東京・渋谷区)を造った伊藤邦衛さんの事務所にも押し掛けたりして(笑)。

仕事を生み出すことこそ クリエイティブ

平賀 自然環境を分断しながら、ものづくりを続けてきた社会に対する不信感からか、僕が講師をしている建築やランドスケープの学生たちは、緑を使って分断された領域をつないでいこうとする傾向があります。彼らの提案する装飾的な緑を批判することは簡単ですが、彼らの目指す世界観が、都市緑化のアイコンともいえる「アクロス福岡」を介した既視感の上に成り立っているとすれば、都市の中にも森のような環境循環システムをクリエーションできる可能性があることを彼らは本能的に見極めているともいえます。そう考えると、田瀬さんが示されてきた世界観をようやく素直に理解できる世代が現れ始めた、という感慨があります。その事実を認識するためにはわれわれの世代も「素直である」という条件が必要になりますが(笑)。

それはさておき、生物多様性の問題は、要素が少なく画一化されたものほど、社会のシステムが安定すると思ひこんできたことの弊



「クイーンズ メドウ カントリーハウス」(2008年「Landscape Design 58号」掲載)は人馬が共生する文化の再生と限界集落の再生がテーマ 撮影／平賀 哲

害ではないかと思うんです。その一方で、要素が複雑で多様化された状態ほど、自己修復機能が働きやすく環境のシステムが持続されやすいことがさまざまな分野で解明されつつあります。その回復方法のひとつを田瀬さんが示してくれていると思うんです。「素直」にものごとをとらえて、もともとそこにあった土や水、植物を大切にすれば、必然的に多様性は回復するという。そして、それらを価値化していかないといけないでしょうね。言葉を替えるとビジネス化するという。

田瀬 そうですね。既存の仕事のスタイルにとらわれて公共事業がない、仕事がない、という前に、ないところに仕事を見いだすことこそクリエイティブだと思うんですよ。ですから今のランドスケープ業界は若い人や業界外の人ほど、アドバンテージがあるということだと思います。

「クイーンズ メドウ カントリーハウス」(岩手県・遠野市)などはまさにそのよい事例です。遠野市の限界集落と人馬共生の地域文化再生プロジェクトとして、'97にランドスケープを手掛けて以来、かわり続けているのですが、現在の活動はランドスケープアーキテクトのフィーにつながるようなことはありません。しかし、それだからやらないのではなく、地域がフィーを払えなくても自分自身が動くことで仕事を生み出すきっかけを模索する。そうすることによって、いろいろ見え、気づき、考えることが増え、結果的に都市で

の仕事に新しい発見をもたらすことになり、よい結果につながっています。限界集落のような地方と世界都市・東京という両極を見ること、対局を常に自分の中に入れておくバランスのとれた仕事ができると思うんです。

平賀 地域再生や都市再生というのは、その土地で生を受け、暮らし、死んでいくということが当たり前だと思える世の中になるということだと思います。これからは、自分がどこでどのように死んでいくのかということが、もっと議論される社会になるでしょう。だからなおさら、その土地で生きていく覚悟を持てるような、そのような生き方のデザインを、ランドスケープデザインにかかわるものとして、何かしら打ち出してみたいと思っています。僕自身は徳島という土地で生を受け、今は東京で暮らしていますが、自分が何によって生かされているのか、もう少し悪戦苦闘しながら考えてみるつもりです。そのためにも、田瀬さんがおっしゃられた、「対局を自分の中に入れておく」ことはとても大切だと思います。

感性の多様性を 育むことが大切

平賀 東京は、地球のどこの都市よりも発熱量が多く、CO2排出量削減の取り組みが急務です。しかし、その取り組みは画一化されたエネルギー試算の枠内にとどまり、東京特有の地形や水脈といった未利用エネルギーともいえる土地の力を生かす視点が抜け落ちています。そこでランドスケープアーキテクトが、多様な生命を育む自然観と最先端の環境技術によって、新しい都市再生のソリューションを示すことができれば、地球の未来に向けた大きな希望になるのではないのでしょうか。

田瀬 東京は昔からそういう特殊な位置づけで実験的な街です。戦後、ヨーロッパのように復元はされず、ほとんど焼け野原のような

ところから新しい都市を造り上げていますし。情報も集まってくるから、僕は東京でランドスケープができればどこでも通用するぞと思っていました。

しかし、今の東京は異常です。近々できる「新東京タワー(スカイツリー)」の地上450mの展望台から眺める首都圏50kmは、建材砂漠に見えるはず。東京は多様だというけれど、食べるものはコンビニやスーパーで買ってくる画一的なものだし、代々木公園には植物が沢山植えてあるけれど少しも多様じゃない。その異常さに早く気付いてほしい。一方で、先ほどの話に出た地方のコミュニティは、人が少なすぎてほとんど崩壊しています。高速道路や新幹線から見える景色はどこも一緒ですし、美しくない。

つまり人間の感性の多様性こそ大切にしないと、結局、生物多様性も再生できないかもしれないと思いますね。まずそういうところに考えが及ばないでしょ？ 感性がなければいくら言っても響かない。だからトキがいれば多様性が復元されたと思ってしまふ。

ある意味、そんなふうにしてきてしまったのが今の業界の人たちであるならば、変える力になるのは、先ほど言ったように若い人や業界外の人ではないでしょうか。

平賀 勇気づけられます。今日は多岐にわたり貴重なお話を伺うことができました。どうもありがとうございました。



ひらが たつや
登録ランドスケープアーキテクト。1969年徳島県生まれ。ウエストバージニア大学卒業。1993年～(株)日建設計ランドスケープ設計室。設計長を経て、2008年～(株)ランドスケープ・プラス代表。現在、早稲田大学芸術学校非常勤講師、東京農業大学非常勤講師、桑沢デザイン研究所非常勤講師。主な作品／「飯田町アイガーデンエア」(日本造園学会賞)、「三田ツインビル西館」(ランドスケープ・ライティングアワード最優秀賞)、「東急病院」(東京都環境賞、地球環境大賞国土交通大臣賞)ほか



福岡・中央区
アクロス福岡

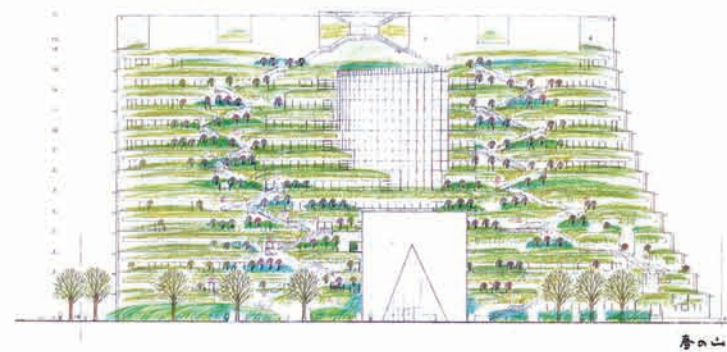
15年にわたる育成管理が
多様性を育む

ランドスケープデザイン／プランタゴ
育成管理／内山緑地建設

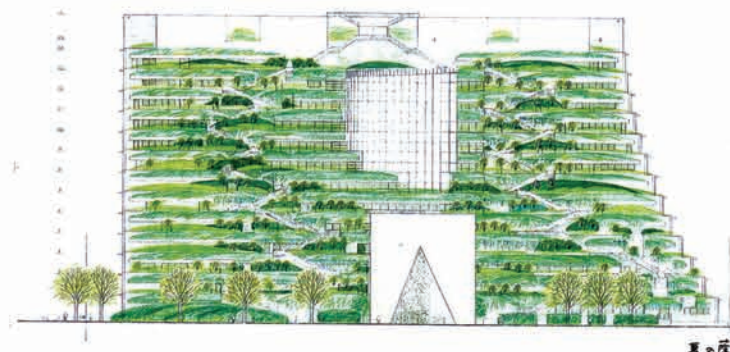
左／「アクロス福岡」鳥瞰。無機質なビル群の中にそびえる“山”は、都市浄化のシンボルでもある。撮影＝MANABU WATANABE/SEBUN PHOTO/amanaimages

「花鳥風月の山」コンセプトスケッチ

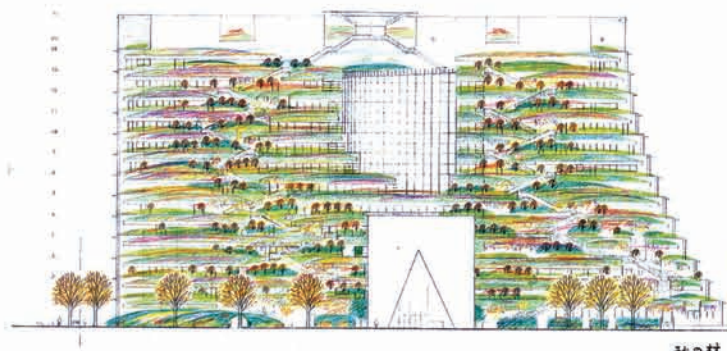
タイトル文字／瀧 梢



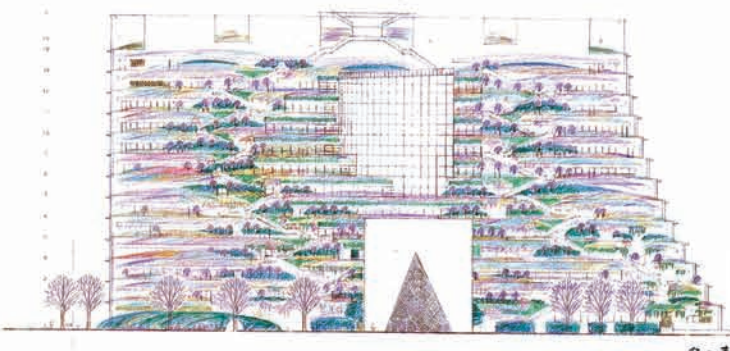
春の山



夏の山



秋の山



冬の山

設計テーマ「花鳥風月の山」を現したスケッチ。都市緑化の新しい試みだったため、現場にかかわるさまざまな人々とイメージを共有するために役立つツールでもあった

春夏秋冬の「アクロス福岡」近影。現在もプランタゴが年間管理の監修を続けており、上のコンセプトスケッチのイメージに近づきつつある。植物の種類も竣工当時より約3倍となった
右下写真撮影＝吉谷 靖



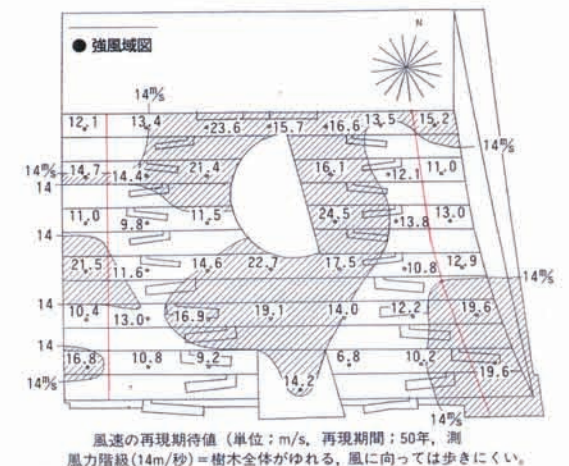
管理監修は プランタゴが担当

福岡随一の繁華街・天神にそびえる「天神岳」＝「アクロス福岡」。竣工後15年を経てどんどん山らしくなっている。それは、ビル管理会社の方針「60年かけて山を育てる」がすべてを物語る。植栽管理の監修をプランタゴが担当し、自然の山に近づけるべく年間の管理計画をたてていることが、今の状況をつくりだしているのだ。

「春の山、夏の蔭、秋の林、冬の森」という四季折々の風景のイメージが実現されつつある。「錦織りなす「秋の林」にするための補植計画」(P29)のような方法で、福岡に自生する樹木の苗木や、野草などを計画的に補植していく。植え付け方なども指示する。今後は福岡らしくウメもさらに補植する予定だ。〔編集部〕

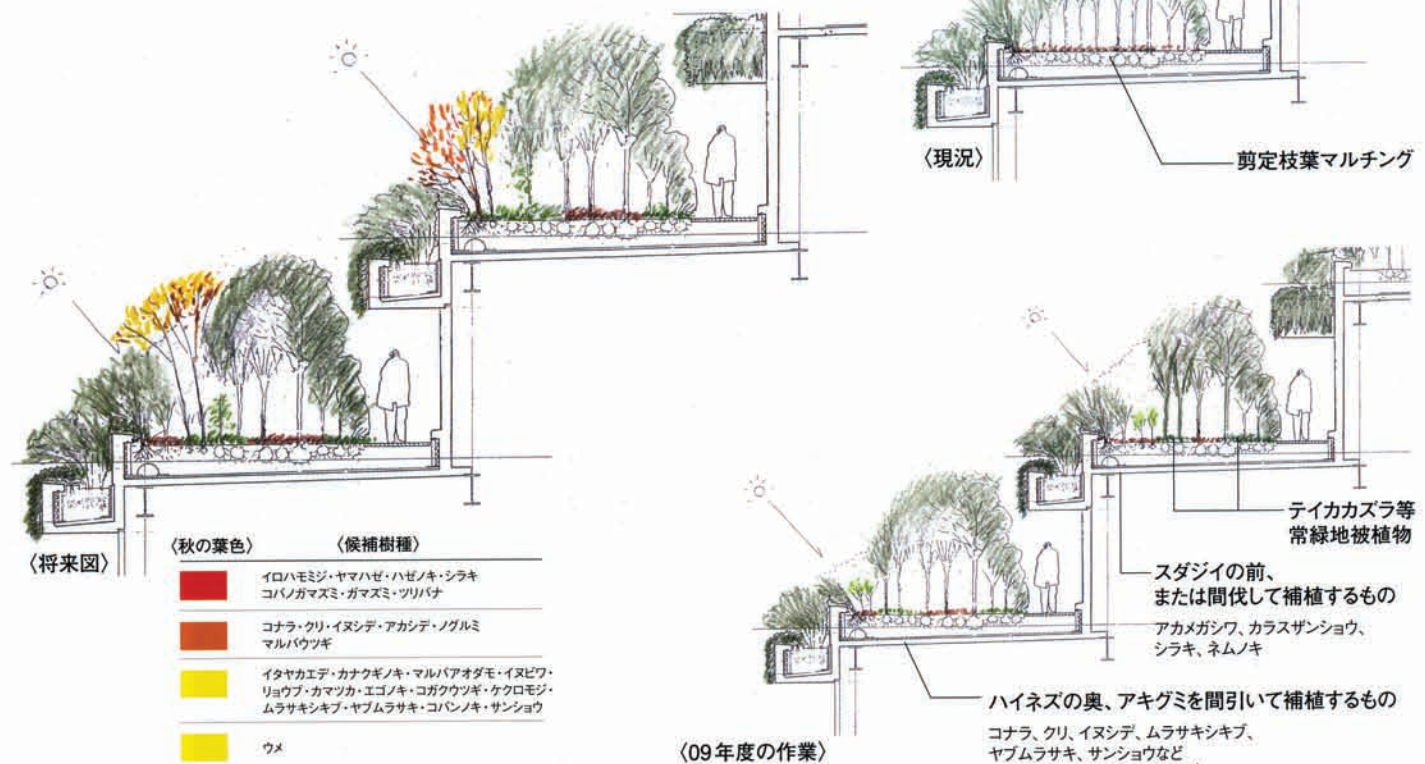


上／2009年「秋の林」の風景。より秋らしくなるよう、剪定や新たな植物の植え込みをどうするかを決めていく。苗木を植え、最低限の手入れをしながら自然の山に近づけていく。右／竣工当初は避けていた強風域にも落葉樹を補植している



剪定した枝を刻んで敷き詰めるマルチング作業風景。枝や葉は、落ち葉とともに土に戻る
写真＝内山緑地建設

錦織りなす「秋の林」にするための補植計画



▶1995年 植物リスト

	No.	植物名		20	ケヤキ		40	ダンコウバイ	○	60	ヒュウガミズキ
	1	アオキ	○	21	コデマリ		41	ツクシドウダン	○	61	ビヨウヤナギ
	2	アキグミ	○	22	コトネアスター		42	ツクシハギ		62	ビワ
	3	アセビ		23	コバノミツバツツジ		43	ツバキ		63	マサキ
	4	イタビカズラ		24	ゴンズイ		○ 44	トウカエデ		64	マユミ
○	5	イチジク	○	25	ザクロ		45	ドウダンツツジ		65	マンサク
○	6	イチョウ		26	サザンカ	○	46	トウネズミモチ		66	ミカン
○	7	イヌエンジュ		27	サツキツツジ		47	ナナミノキ	○	67	ムクゲ
	8	イヌシデ	○	28	サルズベリ		48	ナワシログミ		68	ムラサキシキブ
	9	イヌビワ		29	サワラ		49	ニシキギ		69	メギ
	10	ウメ (白)		30	シイノキ		50	ネズミモチ		70	ヤツデ
	11	ウメ (紅)	○	31	シダレエンジュ		51	ネムノキ		71	ヤマザクラ
	12	エゴノキ		32	シダレグワ		52	バイカウツギ		72	ヤマブキ
	13	エノキ		33	シデザクラ		53	ハイネズ		73	ユキヤナギ
	14	カエデ	○	34	シナサワグルミ		54	ハイノキ	○	74	レンギョウ
	15	カクレミノ		35	シロダモ	○	55	ハクチョウゲ		75	コウライシバ
	16	キノケイ	○	36	シロヤマブキ		56	ハゼノキ		計	75 種
	17	クリシマツツジ		37	スイカズラ	○	57	ハナスホウ			
	18	クちなシ	○	38	セイヨウイボタ	○	58	ヒラギモクセイ			
	19	クルマツツジ		39	ソヨゴ			ヒサカキ			

○印は外来種、または庭木

▶2009年 植物リスト(木本類)

No.	植物名	○	57	ザクロ	115	ハマボウ	137	メギ			
1	アオキ		58	サザンカ	○	116	ヒイラギモクセイ	○	138	モリシマアカシア	
2	アオハダ		59	サツキツツジ		117	ヒコサンヒメシャラ		139	ヤツデ	
3	アカガシ		60	サネカズラ		118	ヒサカキ		140	ヤブウツギ	
4	アキグミ	○	61	サルズベリ		119	ヒトツバカエデ		141	ヤブツバキ	
5	アジサイ		62	サルトリイバラ		120	ヒメウツギ		142	ヤブニツケイ	
6	アセビ		63	サワダツ		121	ヒメユズリハ		143	ヤブムラサキ	
7	アブラチャン		64	サワラ	○	122	ヒュウガミズキ		144	ヤマガキ	
○	8	アベリア		65	シイノキ	○	123	ビヨウヤナギ		145	ヤマグリ
9	イタビカズラ		○	66	シダレエンジュ	○	124	ピラカンサ		146	ヤマグワ
○	10	イチジク		67	シダレグワ		125	ヒラドツツジ		147	ヤマザクラ
○	11	イチヨウ		68	シデザクラ		126	ビワ		148	ヤマハゼ
○	12	イヌエンジュ	○	69	シナサワグルミ		127	フユイチゴ		149	ヤマブキ
13	イヌザンショウ		70	シャシャンボ		128	マサキ		150	ヤマモミジ	
14	イヌシデ		71	シラカシ		129	マユミ		151	ユキヤナギ	
15	イヌビワ		72	シラキ		130	マルバウツギ	○	152	ユスラウメ	
16	イロハモミジ		73	シロダモ		131	マンサク		153	ユズリハ	
17	ウグイスカグラ		○	74	シロヤマブキ		132	マンリョウ		154	リュウキュウハギ
18	ウツギ		75	スイカズラ		133	ミカン		155	リュウブ	
19	ウバメガシ		76	ズイナ	○	134	ムクゲ	○	156	レンギョウ	
20	ウメ (白)		○	77	セイヨウイボタ		135	ムクノキ	○	157	ロウバイ
21	ウメ (紅)		78	センダン		136	ムラサキシキブ			計	157 種
22	ウラジロガシ		79	セリョウ							
23	エゴノキ		80	ソヨゴ							
○	24	エニシダ		81	タブノキ						
25	エノキ		82	ダンコウバイ							
26	オオハマボウ		○	83	ツキヌキニンドウ						
27	オオベニウツギ		84	ツクシドウダン							
28	オオモミジ		85	ツクシハギ							
○	29	カイドウ		86	ツバキ						
30	ガクアジサイ		87	ツブラジイ							
31	カクレミノ		88	ツルウメモドキ							
32	カゴノキ		89	ツルマサキ							
33	ガマズミ		90	テイカカズラ							
34	カマツカ	○	91	トウカエデ							
○	35	キノケイ		92	ドウダンツツジ						
36	キブシ	○	93	トウネズミモチ							
37	クリシマツツジ		94	ナツハゼ							
38	クスノキ		95	ナナミノキ							
39	クちなシ		96	ナワシログミ							
40	クヌギ		97	ナンバンキブシ							
41	クマイチゴ		98	ニシキギ							
42	クマシデ	○	99	ニワウメ							
43	クルマツツジ		101	ヌルデ							
44	クロガネモチ		102	ネジキ							
45	クロモジ		103	ネズミモチ							
46	クワ		104	ネムノキ							
47	ケヤキ		105	ノグルミ							
○	48	コデマリ		106	ハリウツギ						
○	49	コトネアスター		107	バイカアマチャ						
50	コナラ		108	バイカウツギ							
51	コバノミツバツツジ		109	ハイネズ							
52	ゴマギ		110	ハイノキ							
53	コムラサキシキブ		111	ハイビャクシン							
54	ゴンズイ	○	112	ハクチョウゲ							
55	サイコクミツバツツジ		113	ハゼノキ							
56	サカキ	○	114	ハナスホウ							

※草本類は、アザミ類、チガヤ、エノコログサ、カキドオシ、ギボウシ、フキ、ミズヒキ、ヨモギ、スミレ類など109種（外来種14種も混入している）。※○印は外来種、または庭木

豊かな植生を育む ローコストな管理

竣工当初から植物の種類は、草本類を含むで約3倍になった。その中には鳥が運んでた実生ものも含まれる。「アクロス福岡」の植栽は、都市の中にあって動植物の貴重な休息地であり、生態系が形成されている。

都市に山を造り出すという大胆な行為には想像以上に維持管理がかかるものと思いがちだ。しかし、無灌水であり、腐葉土を自然に形成する仕組み（P29）から施肥も行わない。多様な生物によって形成された環境で生き抜く植物は、丈夫に育つため病気の心配も少なくて済む。結果的にローコストになる仕組みがこのような仕組みは、計画当初から田瀬により提唱されていたものである。それが可能！

能！していることが証明された。（編集部）

※草本類は、アザミ類、チガヤ、エノコログサ、カキドオシ、ギボウシ、フキ、ミズヒキ、ヨモギ、スミレ類など109種(外来種14種も混入している)。※○印は外来種、または庭木

豊かな植生を育む
ローコストな管理

竣工当初から植物の種類は、草本類を含めて約3倍になった。その中には鳥が運んできた実生のものも含まれる。「アクロス福岡」の植栽は、都市の中にあって動植物の貴重な生息地であり、生態系が形成されている。

都市に山を造り出すという大胆な行為には、想像以上に維持管理がかかるものと思いがちだ。しかし、無灌水であり、腐葉土を自然に生成する仕組み(P29)から施肥も行わない。多様な生物によって形成された環境で生き抜ける植物は、丈夫に育つため病気の心配も少なくて済む。結果的にローコストになる仕組みだ。

このような仕組みは、計画当初から田瀬氏により提唱されていたものである。それが機能していることが証明された。(編集部)

▶1995



写真=日本設計

▶1998

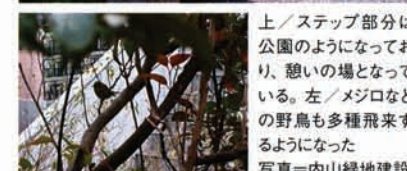


写真=日本設計

▶2008



写真=プランタゴ



上/ステップ部分は公園のようになっており、憩いの場となっている。左/メジロなどの野鳥も多種飛来するようになった
写真=内山緑地建設



上/植樹した樹木や草が生い茂る「地球のたまご」(2004年「Landscape Design No.39」掲載)の近景。中/竣工当時の様子。まだ植物の勢いは感じられない。写真=OMソーラー。下/もともと自生していたヨシ、クサヨシ、チガヤなどを移植して池の周辺も一面緑に覆われている。



地球のたまご

静岡・浜松市

建築設計/永田昌民+OM研究所

蘇える
浜名湖流域の生態系

ランドスケープデザイン/プランタゴ





左／建築も適度に植物に覆われている。上／エントランスから敷地でたくましく育った植物が生い茂る丘を見る。下／壁面をつたう緑陰をつくるつる性植物・ジャコウフジ(2006年夏施工)

スタッフ自らが取り組む生態系回復の試み

バブル期に埋め立てられ放置されていた養鰻池跡地に、2004年、竣工した「地球のたまご」。施設全体のコンセプト「浜名湖の湖岸を守り、水源となる」ための活動を、現在も続けている。

「どんぐりプロジェクト」と名付けられたその活動は、OMソーラーのスタッフが、地域の植生を調査し、採取した実生や挿し木から育成。野芝を除き、浜名湖畔に自生する在来種の植物で、施設の植栽を構成するという試みである。スタッフは慣れない作業に手間取ったというが、その後の維持管理にスムーズに取り組むことにつながった。

この施設全体が在来種の植物で覆われれば、敷地全体が優良な水源地として機能するという。雑排水や汚水の処理も完全に施設内で行われている。

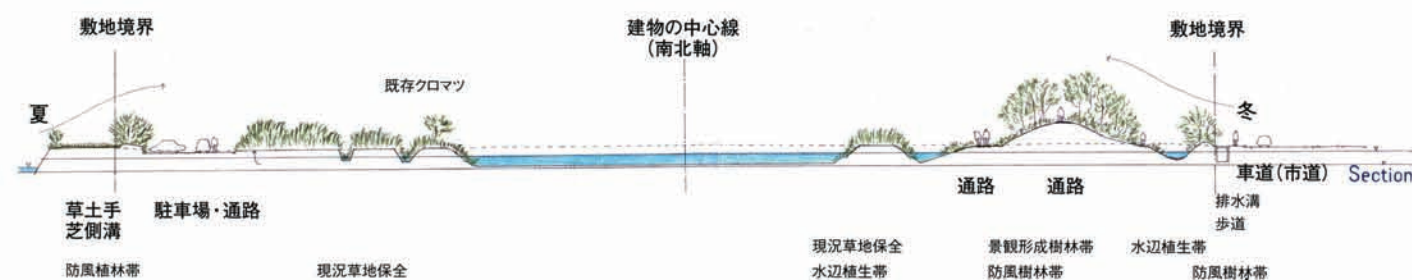
こうして水質が向上した水を、将来的には護岸の一部を撤去して開水路で放流し、浜名湖に生息する生物を遡上させることも計画されている。

「どんぐりプロジェクト」を始めとする一連の取り組みをイベントなどを催すことで、「地球のたまご」を環境学習の場として積極的に開放しているのも特徴だ(P33写真)。

竣工から6年。植物の営みのペースと歩調を合わせて、ここでの生態系は確実に回復しつつある。〈編集部〉



建築の中央を南北につなぐコリドール。開口部も植物に覆われつつある。いずれは建物全体が森に囲まれる予定なのだという



左上／「地球のたまご」では環境学習などのワークショップも開催している。右上／穂を出した植物に月という、日本の秋の風景も楽しめるようになった。左下／ペンケイガニも生息している。右下／2007年4月には施設内の野草を食べるワークショップが開催された。写真は野草のてんぷらに見入る子どもたち 写真＝OMソーラー



Plan

